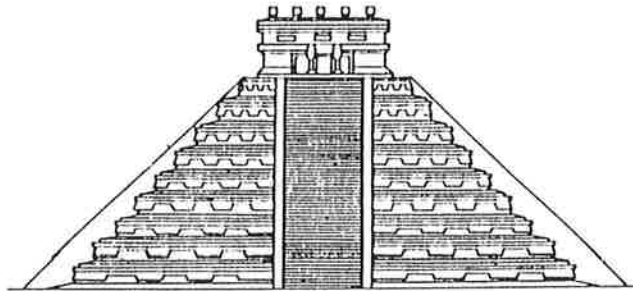


日本イコモス国内委員会

# JAPAN ICOMOS INFORMATION

第4期 第9号 2000年2月7日 発行



## 目 次

特集・メキシコ総会報告—はじめに .....	石井 昭	1
メキシコ総会・水中文化遺産委員会 (ICUCH) に出席して .....	荒木伸介	2
メキシコの歴史的遺産—スペイン植民都市とスペイン時代以前の遺跡 ..	土井崇司	4
総会 (第1部・第2部) の主要議事 .....	石井 昭	10
メキシコ総会を終えて—偶感 .....	伊藤延男	14
ワークショップ「Historical towns and villages」の論点とその様子 .....	片方信也	15
メキシコにおける第12回総会と Legislation Session について .....	河野俊行	17
アスタマニアーナで始まるメキシコ会議 .....	前野まさる	19
文化観光専門委員会報告 .....	宗田好史	23
第12回イコモス総会メキシコ大会に参加して .....	西村幸夫	25
イコモス第12回総会 (メキシコ) に出席して .....	大河直躬	27
イコモスメキシコ総会に出席して .....	杉尾邦江	30
諮問委員会議 (ADVISORY COMMITTEE MEETING) 報告 .....	石井 昭	33

JAPANESE NATIONAL COMMITTEE

ICOMOS

INTERNATIONAL COUNCIL ON MONUMENTS AND SITES / 国際記念物遺跡会議

表紙 : チチェン・イツァーのカステイヨ  
COVER : Castillo in Chichen Itza

# 特集 メキシコ総会報告

## はじめに

本誌の前号に載せた「速報」でも紹介した通り、去る1999年10月17日から23日までの1週間においてメキシコ国内の4都市（メキシコシティ、グアナフアト、モレリア、グアダラハラ）で開催された第12回 ICOMOS 総会（GENERAL ASSEMBLY and INTERNATIONAL SYMPOSIUM）には、わが日本イコモスからも、総勢 11 名の会員が参加しました。すなわち、荒木伸介、土井崇司、石井 昭、伊藤延男、片方信也、河野俊行、前野まさる、宗田好史、西村幸夫、大河直躬、杉尾邦江（アルファベット順）の各氏です。

本号では、これらの方々の全員による寄稿から成った「特集・メキシコ総会報告」をお届けします。先ず、当総会におけるプログラムの要点を記し、併せて誰が何処に出席したかを示しておきましょう。

## 総会 第1部 ..... ( 10月17日 )

会場 MEXICO CITY - PALACIO DE BELLAS ARTES  
出席者 荒木・土井・石井・片方・河野・西村・大河・杉尾

## シンポジウム ..... ( 10月18-21日 )

基本テーマ <THE WISE USE OF HERITAGE>

会場 MEXICO CITY - PALACIO DE MINERIA  
部会テーマ <HERITAGE AND CONSERVATION>  
専門委員会 ① ARCHAEOLOGICAL MANAGEMENT, ② UNDERWATER CULTURAL HERITAGE,  
③ ANALYSIS AND RESTORATION OF STRUCTURES, ④ RISK PREPAREDNESS  
出席者 荒木

会場 GUANAJUATO - CENTRO DE CONVENCIONES  
部会テーマ <HERITAGE AND SOCIETY>  
専門委員会 ① ECONOMY OF CONSERVATION, ② TRAINING, ③ LEGAL ISSUES,  
④ CULTURAL ROUTES, ⑤ INDUSTRIAL HERITAGE(\*)  
出席者 河野・西村・杉尾 (\* 設立準備中の専門委)

会場 MORELIA - CASA DE LA CULTURA  
部会テーマ <HERITAGE AND TERRITORY>  
専門委員会 ① HISTORIC TOWNS AND VILLAGES, ② VERNACULAR ARCHITECTURE,  
③ WOOD, ④ EARTHEN STRUCTURES, ⑤ STONE  
出席者 土井・片方・前野・大河

会場 GUADALAJARA - HOSPICIO CABAÑAS  
部会テーマ <HERITAGE AND DEVELOPMENT>  
専門委員会 ① WALL PAINTING, ② CULTURAL TOURISM, ③ HISTORIC GARDENS AND  
SITES, ④ PHOTOGRAMMETRY, ⑤ 20TH CENTURY ARCHITECTURE(\*)  
出席者 石井・宗田

## 総会 第2部 ..... ( 10月22-23日 )

会場 GUADALAJARA - HOSPICIO CABAÑAS  
出席者 荒木・土井・石井・伊藤・片方・河野・宗田・西村・大河・杉尾

7日間に及んだプログラムは以上の通りですが、広い意味での「メキシコ総会」となると、これに尽きるわけではありません。直前の10月16日には、諮問委員会、執行委員会、両者合同会議、等々が催され、日本イコモス代表としての石井と本部執行委員としての西村氏がそれぞれ所定の会議に出席しました。また、総会終了後の10月24-30日には、メキシコ国内の古都や史跡を巡る6種のツアー（POST-CONGRESS TOUR）が催され、その中の「マヤ世界探訪コース」に荒木、土井、片方、河野、大河の各氏が参加しておられます。次ページ以下の諸報告は、むしろ、こうした広い意味でのメキシコ総会を扱ったものとしてお読みいただければ幸いです。

( 石井 昭 )

なにしろハードなスケジュールであった。参加申込書をFaxで送り、出発前にEメールでやりとりしたのだが「空港に出迎へに出るので、便名と到着時刻を報せてくれればよい。」とのことで、ホテル名の連絡はついになく、いささか不安な思いで出発した。

10月15日の17時50分メキシコシティに到着。空港には約束どおり関係者が迎えに出てくれたので一安心。そのおかげか、出国手続きは驚くほど簡単に済んだ。しかし、それからロビーで待たされること約3時間。この間に徐々に参加者の到着も増えはじめ、お互いに自己紹介をするなどしてバスへの案内を待っていた。だれしも長旅の疲れから、早くホテルで休みたく、やがて不満の声があがりはじめた。ようやくホテルの割り振りが決まったようで、ホテルへのバスに案内された時にはとつぷりと日が暮れていた。

翌日は予定もなく、遅い朝食を済ませ街に出た。まずは国立民俗学博物館をめざし、さらにタマヨ美術館を訪れた。夕刻、メキシコ在住の知人と10数年ぶりに会い、その勧めに従い、市内の歴史的町並みをめぐる観光バス(電車のようなスタイル)に乗った。ガイドはスペイン語だけなので、知人が日本語混じりの英語に訳してくれたので大いに楽しめ、街の配置を頭に入れることができた。残念ながら近郊の遺跡を見る時間はなかった。

10月17日、いよいよ総会開催日である。朝8時から登録受け付けとあるので、早めに出掛けたが、開始されたのは8時半を回っていた。受け付けの手順が悪く、もたつき、すぐに長蛇の列。これなら前日の内に済ませてしまえばよかったと思ったが後の祭り。おまけに私の参加費は支払われていないので、先に隣の受け付けで支払うように言われ、さらに時間が掛かってしまった。申し込みの時点で、クレジットカードで支払うよう手続きをしたのだが、受け取っていないとのことで、再度支払い手続きをしなければならなかった。ところが、帰国してカード会社からの請求を見ると、なんと2重の、しかも私が申し込んだカテゴリーよりはるかに高額で、プログラムの案内に無いほどの額であった。現在、その支払いを拒否し、カード会社に調査を依頼している。一事が万事お粗末で、手順の悪さはグアタハラへの移動、最後の次期会長選挙にまで及んだ。

ICUCH(International Committee on the Underwater Cultural Heritage)は、プログラムによれば19日の14時からになっていたが、POST CONGRESS TOURSの手続きもあり、早めに会場であるPalacio de Mineríaに向かった。受け付けで場所を尋ねているところに偶然にも委員長のRobert Grenier氏が現れ、会場へと導かれた。氏は、私がICUCHの正式メンバーとして未だ登録されていないことについて「石井委員長から強く非難されたが、手続きの関係上、次回まで待つてほしい。しかし今回は、メンバーと同格として対応することに出席者全員の了解を得ている。」との話で私も了承した。部屋には委員長を含め11名が出席していた。委員長の求めに応じ、自己紹介をかねて日本の水中考古学の現状について手短かに話をすることになり、開陽丸に及ぼうとしたとき、オランダの若い委員が「えーとなんとかMARU、えーとえーと・・・? そうだKAIYOU-MARUだ!」と言ったので驚いたが、1979年にオランダ・ドルトレヒトで、建造地に里帰りして開催した「開陽丸展」を少年時代に見て、興味を覚えたのが水中考古学への始まりだと話してくれた。残念ながらその時の私の講演は聞いていなかったようである。実はこのメンバーのほとんどが総会に出席せず、前回からの受け継ぎ事項などについて16日から会議を開いていたのであった。私が出席してからの中心的テーマは①「トレジャーハンティング(Treasure hunting)への

対処」と②「水中文化遺産の世界遺産への対応」であった。①はカリブ海に面した地域では深刻な問題である。国によってはその成果の何パーセントかを収めれば許可されることもあり、大国が競って探査、発掘を行なっている。中には、巨大会社が資金のバックアップをし、自称水中考古学者が調査・引き揚げに参画しているものもある。問題は、人類共有の歴史的文化遺産として公開、還元されることなく、オークションにかけられ好事家の収集品として納まってしまうことである。また、多少なりとも政府の収入になることから各国によって対応が異なり、どのように法の整備を促していくか、どのようにアピールしていくか、その表現を巡っても論議された。②は、特に沈没船に関する問題で、基本的に船は「MOVING MONUMENT」であり、建造国と沈没地とが必ずしも一致しないのが通例である。その所有、権利を巡る基本的問題についてコンセンサスが得られなければ紛糾を呼ぶ恐れもある。この問題に関しては、Henry Cleere氏をオブザーバーとして迎え、協議がすすめられた。可能性としては、スウェーデンのワサ号（1628年、ストックホルム港から処女航海に出たが、港外で突風にあおられ沈没。1961年に引き揚げられ、ストックホルム港に設けられたワサ号博物館で保存修復を施しながら公開されている。）とイギリスのメアリー・ローズ号（1511年、ポーツマスで建造。1545年ポーツマス港外で沈没した。1982年、チャールズ皇太子を総裁とするトラストにより引き揚げられ、現在はポーツマスの海軍基地内にあるドックで、公開しながら船体の保存処理がすすめられ、付属する博物館には遺物が展示されている。）があげられた。特に、メアリー・ローズ号はチャールズ皇太子自身も潜水調査に参加したこともあり、世界遺産委員会の受けはよいかもしれない、この話もあった。一方、第2次大戦時に日本の奇襲に会い、真珠湾に沈んだアメリカの戦艦アリゾナもあり、現在は沈んだままの状態で開催されている。これも広島原爆ドームとの関連を視野に入れておかなければならないとの指摘もあった。世界遺産にノミネートするためには第一に基本的ルールの方針策定であり、今後の課題として継続検討されることになった。

20日の朝から夕刻にかけては、さまざまな調査事例の発表が行なわれた。今回はメキシコが開催地である関係上、中南米からの参加者が多く、日本にはほとんど伝えられていない事例が多く興味深かった。アルゼンチンで発掘された沈没船からは、日用雑器に属する陶磁器が多数引き揚げられていた。私の、数点は日本製ではないかとの質問に対し、数葉の写真の預けられ、日本の研究者の判断を仰いでほしいと依頼された。

21日は、昨日に続く事例発表、そして発表者と委員会メンバーによるディスカッションが行なわれた。委員のほとんどが、午後にはグワダハラに向かうものと思っていたが、委員長をはじめ大多数はその予定はないとのこと、いささか驚いてしまった。私も出発前に発言を求め、昨日以来の発表に対する感想を述べた。探査機器や発掘技術は日本もほとんど変わりがないこと。脱塩・保存方法に関してはわれわれの方がやや進んでいると思われること。引き揚げが完了するまで海底に残された木造船体の保存方法などを紹介し、次の機会にはスライドなどを用意し、あらためて紹介することを約束した。また、アルゼンチンの例のように、陶磁器が引き揚げられることはこれからも予測されるし、陶磁器は交流交易の資料として、また年代判定の上からも重要な遺物である。これに関する研究者の数はたぶん日本の方が多し、研究も進んでいるので協力できると話してきた。

どこの国でもそれなりに、発掘調査の組織、研究機関、引き揚げ遺物を保存し公開活用する博物館、水中考古学研究者の養成・訓練施設などが一体となって活動している。まったく羨ましいかぎりであった。その成果が、全体的に若手研究者の増加、特に女性の活躍が目立った。次期ICUCHは来年12月、あるいは2001年1月に、アルゼンチンの二大学、一研究所の協力を得て首都ヴェノスアイレスで開催することになった。遠い国である。

## メキシコの歴史的遺産－スペイン植民都市とスペイン時代以前の遺跡－

土井崇司

もうイコモス会員になって11年目に入っていますが、平生は何回か講演会を聞かせていただいた以外は、日常の仕事に追われて ICOMOS NEWS や JAPAN ICOMOS INFORMATION もほとんど読んでいない不良会員でした。今回は総会もさることながら、メキシコで行われるということで、私の研究テーマに関連して、スペイン時代以前のメキシコの建築・都市空間をぜひ見てみたいと思っていたところ、会議後のツアーでいつかの遺跡を見学することになっているので、初めて参加することにしました。

総会や専門科学部会については、いろいろの意味で大変面白く、また世界の現状を知る上でも大変勉強になりました。会議については、多数参加されているので他の方々にご報告されると思います。私はメキシコの歴史的遺産－スペイン時代からの諸都市とスペインが入る以前の遺跡－についての見聞を報告します。それらは私にとって期待以上に面白く、やはり実際に現地で体験するということが重要であることを改めて知らされました。

### スペイン時代からの植民都市

メキシコには相当大規模にスペイン時代からの植民都市の立派な町並みが残っていて、私にとって新たな発見でありました。知識としてメキシコは19世紀の初めまでスペインの植民地であったということは知ってはいましたが、歴史都市がこのようにたくさん、広範囲に残っているというのは、今回訪れ体験してやっと蒙を啓らかれました。世界遺産にも登録されている都市も多く、会議の開かれたメキシコシティ、モレーリア、グアナファト、グアダハラハラなどの四都市のスペイン時代の部分が世界遺産に登録されています。この他にもサカテカス、オアハカ、プエブラ、トゥラコタルパン、ケレタロなども登録されています。後述のメリダのように世界遺産に登録されていないものでも、相当立派な町並みが残っている都市もあり、歴史遺産が非常に豊富な国であることが実感できました。

最初のメキシコシティでの会議は前日の登録日を除いて開会式一日しかなく、時間が限られていたので、会議の合間に町や国立人類学博物館を急いでまわりましたが、充分見る時間はありませんでした。ただ一日早く到着していたのと宿舎のホリデイ・インがソカロと呼ばれるメキシコシティ歴史地区の中心である広場に面していたので、会議や登録の行き帰りなどに歴史地区の相当部分を見ることが出来ました。

メキシコシティではさすがに近・現代建築が多く見られましたが、歴史地区内では近現代の建物はあまりなく、四、五階を限度として軒の高さも揃えられています。古いままの雰囲気が大体保たれているようです。ソカロ（憲法広場、共和国広場ともいう）は一辺200m以上の広大な中心広場で、コルテスが16世紀の中頃から建てさせたバロックの堂々としたメキシカン・カソリックの総本山と大統領府・大蔵省の入っている国立宮殿や政府庁舎が三方を囲んでおります。町の広場として世界で最も広いものの一つといわれています。広場の残る一辺にはホテルや商店が軒を並べており、我々の宿舎であるホリデイ・インもその一つで、朝食のレストランから大聖堂と広場とがすぐ前に見られて、毎朝巨大なメキシコ国旗が、国立宮殿から一隊の兵士によって軍楽隊とともに持ち出され、広場にコの字型に整列した高校生の見守る中で掲揚されます。夕方も朝とは逆の手続きで降ろされ、また国立宮殿に運ばれ保管されているようです。

ホリデイ・インの近くには19世紀末に建てられた商品取引所を30年ほど前からホテルに利用しているという Gran Hotel というのがあり、その入口ホールは五階ほどの吹き抜

けで、広い天井屋根は美しいステンドグラスであり、吹き抜けの各階の手すりの詳細や、またホール入口には大きな鳥籠がステンドグラスや鉄のアールデコの装飾で飾られています。このようなアールデコ様式がそのまま残っている建物が、百貨店など他にも二つあるということです。このように歴史地区の中にはバロックの教会や公共建築、それにこのような折衷様式の建築も多く残っているようです。

イコモス総会の専門科学部会では上記の四ヶ所の町に分散して行われ、私はモレーリアに行き、会議最終の2日間は全員グアダハラに再集結しました。この間中、あまり面白くなさそうな発表や会議はオミットして、町を歩きました。私は会議の行われた四つの町の内、鉱山町グアナファトのみは行けなかったのですが、そこもすばらしかったということです。これらの町では規模は小さくなりますが、メキシコシティと同じように、スペイン時代からのルネッサンスやバロックの聖堂、役所や大学などの公共建築が、ソカロと呼ばれる中央広場のまわりに整然と並び、堂々としたデザインの建物が囲んでいるのは印象的です。中心地区は植民地の計画都市の中心として広々と作られていて、その周囲の町並みも相当広範囲に古い住宅や商店の建物が残り、高層の現代建築などによる景観の破壊が殆んど見られず、スペイン時代の雰囲気そのまま残しているのはすばらしいことです。

モレーリアでは中心部の広い部分で、二階建てを超える建物は教会の塔のみで、アクァダクトも残っており、ヨーロッパの中世末から近世初の都市がもとのままメキシコに出現したようです。革命家モレーロスの生家と住んだ家が2軒開放されていましたが中庭式住居です。他の建物も通りから覗くと全て中庭式の様です。メキシコは、原住民との混血も進み、



モレーリア中心部－聖堂の塔以外は殆ど2階建てのみ

ヨーロッパとは相当違うのではないかと漠然と考えていたのですが、このような都市を見る限りは、完全にヨーロッパの延長であるなど強く感じられます。メキシコ社会の上層の人たちはスペイン系の白人で、会議に出てくる人たちもそのような人々がほとんどで、国語がスペイン語であることもあり、やはりスペインを初めとするヨーロッパとの結びつきがいろんな意味で強いのではないのかと感じられました。

グアダハラはメキシコ第二の都市ということで経済活動も比較的活発のようで、町並みの残り方は、旧市街全体とはいかず、限られているようですが、会議場のあった歴史地区の一部にデッキを作り、下は駐車場にしたり、周辺の現代建築の高さを低く揃え、デザインを古いものと調和するようにするなど、現代的な必要と調和させて歴史都市部分を生かす工夫が見られました。またグアダハラでは中心部に広場が多くあり、それぞれの広場は樹木が幾何学的に植えられ、スペイン風のデザインで、昼休みやシエスタの時間から夕方・夜にかけて、人々の生きた生活の場、憩いの場となっていました。会議の運営は

混乱しましたが、メキシコの人々はそんなことは当たり前という感じで、気にせず、よく喋り、よく食べ、よく集まり、ダンスをしたり、街角でマリアッチなど音楽を聞いたり歌ったりして我々の忙しい生活と異なり生活を楽しんでいるようにみえました。

また、会議後のツアーでメリダとカンクンに滞在しましたが、カンクンの旧市街の中心部は既に近代的に変えられていて、中心広場に野外音楽堂が建てられたり、教会はシェル構造の近代建築に変わっていました。しかしメリダは世界遺産に登録はされていないようですが、ソカロとそれに面したルネッサンス様式の古い聖堂とバロックの政庁、大学などの公共建築が残り、旧市街地中心部には広い地域にわたって古い建物が残っていて、ホテルなどに改装され、利用されているものもあります。ここでは改装した建物のスタッコの上にピンクや空色などの派手な色を塗っていましたが、奇妙に良く映えています。このように一地方都市のここにも歴史的町並みが大規模に残っていて、改めてメキシコにはスペイン植民地の残映がたくさん残っていることに感心した次第です。

このような立派な町並みが残っているということは、逆に近・現代での経済状態が芳しくなく、建設活動があまり活発でなかったということで、日本のように建設活動が盛んだった場合には相当破壊されてしまっていたに違いありません。

#### テオティワカン

メキシコのスペイン時代以前の都市遺跡も、私の研究テーマとも関係して非常に面白く体験してきました。メキシコシティでは、アステカの首都テノクティトランの破壊の上に建設されているので、考古学的な遺跡がビルの谷間に残っている程度で、建築家としてはあまり興味が湧きませんが、郊外に世界遺産・テオティワカンがあります。会議の前に一日余裕をもってメキシコシティに来ましたので、会議の始まる前日に会議の参加予定者10人からなるツアーに参加しました。ツアーの運転手兼ガイドに土産物屋につれて行かれ、長時間無駄になり閉口しましたが、テオティワカンは80%ほどが修復されているということで、広大な儀礼センターの全貌を見ることが出来ました。そのスケールと周囲の山々との関係など、現地に来て歩いてみてよくわかり、大変興味深いものでした。月のピラミッドの重要性などが現地で景観と配置を体験することによってよくわかりました。

テオティワカンは内陸部の高地にあり乾燥した気候です。サボテン類や低い灌木がまばらに生えた低い山々に囲まれた盆地で、ツアー参加者の一人の日本をよく知るフィンランドの建築家から、これはヤマトと同じだなといわれ、乾燥地にある石造のヤマトかなと答えました。地形的には大和とよく似ていて、周囲を囲む山々が、大和の青垣山ではなく、樹木のほとんどないギリシャなどにも見られるような裸の山々なのが大きな違いです。山



グアダラハラのバロックの裁判所の立面



の位置、形など周囲の景観をデザインのなかにとり入れ、雄大な都市デザインを構築しています。山々に囲まれた土地を意識的に選びそれをデザインに利用しているという景観に対する鋭い関心は日本と共通だと感じました。しかし、自然の風景の中に、巨大なスケールで圧倒的な石造の創造物人工の空間を作るという強烈な建設の意志が感じられます。一方、日本では難波



Teotihuacanーケツァルコアトル、太陽、月のピラミッド

宮や飛鳥の宮々あたりの時代にあたりますが、自然に溶け込んだような印象のある日本の建造物とだいぶ違うなという感じです。

テオティワカンとは紀元前2、3世紀から出現し始め、2世紀半ばには現在みられる景観を既に完成し、さらに6世紀ころには人口20万に達していたといわれています。一般の住人たちは、この儀礼センターの周囲の森の中で、日本の農家ともよく似ていて現在も地方で住まわれている木造草葺でスタッコ塗り壁の農家に住み、焼畑をして暮らしていたようです。テオティワカンの神官支配者はメソアメリカ一帯を支配していたのではないかと推定されていて、その富を背景としてこのような巨大な空間を作ることができたのでしょう。しかし7世紀に入ってから衰退し初め、7世紀後半外部からの侵略があったらしく、大規模な火災の痕跡が考古学的に確認されているそうです。この文明が以後のトルテカ、アステカ、マヤなどの原型となりメソアメリカ文明の核となったといわれています。

この文明の担い手ははっきりわからず、都市の衰退後にどこに行ったのか、消えたのかもよく分かっていないということです。しかし、テオティワカンではピラミッドの装飾にもなっている二つの主神に対する信仰があります。一つは羽根をもった蛇、ケツァルコアトルという水と農耕の神に対する信仰で、これは後にトルテカ、アステカにも伝えられてククルカンと呼ばれ、マヤにも続いています。他の一つはトラロックといい太陽を毎日運ぶ火の蛇（一説には雨の女神）に対する信仰であり、これもマヤやアステカまで続きチャックと呼ばれています。このように主たる神の信仰は、建築様式や装飾類とともに、この地域の文明を通じて伝わっていて、各文明は同じ流れのなかにあるようです。

### ユカタン半島のマヤ遺跡

テオティワカンとは異なるマヤ文化の遺跡は、24日から30日までの会議後ツアーで回りました。植民地時代の美しい都市メリダを基地として、カバー、ウシュマル（世界遺産）の遺跡へいき、その後、世界的なリゾート地のカンクンへ行く途中で、イザマル、チチェン・イツァ（世界遺産）を見ました。カンクンからトゥラム、シェルハと合計六ヶ所のマヤの都市遺跡をこのツアーで見たこととなります。ツアーの最後の二日間はリゾート地のカンクンでの自由日で、美しいカリブ海で泳いだり、潜ったりをするようになっていましたが、私には興味がないので、他の重要な遺跡を見ることにしました。グループから離れ単独行動をすることにし、一泊でパレンケ（世界遺産）に行き、そこからメキシコシティ経由で日本に帰ってきました。当初はグアテマラのティカル（世界遺産）にも行きたいと思っていましたが、どこからどのように行ったらいいか、日本の旅行社でもあやふやで

よく判らず、現地の旅行社のEメールもあまり信用できず、今回は断念しました。

上記七ヶ所の内イザマルでは、マヤ遺跡のピラミッドの台の上に16世紀後半西半球最初といわれるカソリックの修道院が建てられていて、マヤの遺跡は見ることは出来ません。従って実質的にはマヤ遺跡は六ヶ所見たこととなります。

ツアーで見学した五つの遺跡はユカタン半島にあり、マヤ文化の区分で、北、中央、南の三地域の内、北部に属することになります。この地域の地形は低い緩やかな丘が続く平坦な台地です。メキシコの中央高地のテオティワカンなどよりも少しは湿潤で、雨期には雨も少し降りますが、乾燥地帯です。石灰岩からなるカルスト台地ということで、降った雨は全て地中にしみ込み、地上に川はほとんどありません。水は地下に溜まり、また流れています。時には地中の水たまりの空洞の上部の地面が陥没して、セノテと呼ばれる泉が出来ます。チチェンイツアには巨大なセノテ、聖なる泉があります。カバーでのように井戸を掘って水源としているところもあるようです。この地域ではこのように水の得られるところに都市が出来たのでしょうか。このような乾燥地としての植生は低木の藪で、土地が石灰質であることも原因かもしれませんが、樹高は5mあたりから10mくらいの樹林が続き、ときおり15mくらいの樹林が一部出てくるといった感じでした。都市の儀礼センターはこのような見渡す限りの樹林に囲まれた空地、いわば凹型の空洞から、ピラミッドとその上部の神殿が空中に突出しているという景観です。神の場所が、神の本来属する天に突き出ているのでしょうか。マヤのピラミッドはテオティワカンの勾配の緩いものと違って、急な傾斜ですし、またピラミッドの規模も聖域全体の規模もテオティワカンよりも小さいのですが、低い樹林に囲まれているので、その突出ぶりがよく目立ちます。樹林に囲まれているのもテオティワカンとは大きく異なっています。このような森林の中の石造建造物が作り出す空間は、直感的には森林タイプの日本の凹型空間と乾燥地タイプの中東・西欧の凸型空間とも異なる中間的なものではないかと感じられました。



ウシュマルー平らな森の中からピラミッドが突出

通常は内陸にあるマヤの遺跡のなかで、トゥラムはカリブ海を望む美しい海岸の断崖の上にあり、規模は比較的小さいですが特異な遺跡です。マヤでは最も後期の12世紀から16世紀にわたり最盛期を迎えています。建築的には衰えた時期のもので、建物もあまり立派ではなく、構造的にもおかしいようです。しかしその海に面して建設されていることと、海以外の3方に城壁があることが特徴です。海の反対側の城壁の外側は、この地方の他の遺跡と同じように、やはり平坦で低い樹海が見渡す限り続いています。城壁外にも比較的広範囲にわたって遺跡が残っているようです。城壁の内は、約400m×1kmであり、全市域の約10%にあたります。城壁内には、宗教的建物、政庁などの建物と、神官など支配層の人たちの住居があり、城壁の外は階層の最も低い農民、漁民、狩人が住んでいました。

この城壁は外敵に対するものというより、城壁内の人々を最下層の人々から守るのが目的であるという説明を受けました。トゥラムが栄えた時期は商業が盛んで、内陸部の諸都市

と外部との結節点となる港です。遠くドミニカやパナマやコロンビアなどの南米の北岸まで通商に通っていたといわれています。

## パレンケ

旅行の最後にツアーから離れて単独行動で行ったパレンケは、私にとっては今回の旅行で最も面白かった遺跡です。4世紀頃から建設が始まり、7世紀に最盛期に入り、9世紀から10世紀に放棄された都市です。ユカタン半島北部の平坦な乾燥地の遺跡とちがって、今回私が行き損なったグアテマラのティカルなどとともに、熱帯雨林の中のマヤ文明の中部地区に属する遺跡です。この地帯は山々が濃い緑であり、40m前後にまで達する大木が茂り、比較的大きな川も流れ、滝などもあります。パレンケ遺跡の地形は日光などとよく似て、平地から山に移る場所に、山の傾斜を利用して作られており、山々や樹々に囲まれてピラミッドや宮殿、神殿がテラス毎に立体的に配置してあります。

また、現在のパレンケ遺跡への入口のすぐそばにある Temple XI と名づけられた構造物などは、まだ樹々におおわれた山としか見えず、周囲の山々のなかにもまだまだ構造物があるようです。パレンケ遺跡の地図を作成しているチームによると、仕事を始めた98年の2月の時点では541の構造物があることがわかっていたが、99年の6月には750以上あることがわかり、作業の終わる2000年の8月までには1500の構造物が見いだせるのではないかと、また儀礼センターだけでなく、都市の全体構成が見いだせるのではないかと期待しているといえます。この遺跡は世界遺産に登録されているのですが、このようにまだ全貌は明らかになってはいません。

メキシコには、スペイン時代以前のものとして、この他にも多くの遺跡があり、世界遺産に登録されているのだけでもエルタヒン、モンテアルバンなどがあります。登録されていないものにも重要な遺跡が数多くあります。マヤ文明に限っても今回見ることの出来たパレンケなどが属する中部地帯には、グアテマラに入って世界遺産・ティカルやホンジュラスの世界遺産コパンや、更にベリーズにも広がっており、今回全く見ることはできなかった南部地帯はグアテマラ、エル・サルバドルにも続いています。しかも多くの点で不明のことが多いのが実状のようです。まだまだこれから面白い発見があるのでしょうか。

このスペイン時代以前のメキシコでは、世界は三層構造になっていて、神々のいる天人々の生活する地上、地下の冥界となっています。先に記したようにピラミッドやその上の神殿が森を破って天に聳えているのはその表現でしょう。精密な暦が発達していたことは、天体観測が盛んに行われていた結果でしょう。これらのことは上下の垂直の世界意識が強くあることを示しています。日本の水平方向の世界意識とは異なるでしょうが、森に囲まれた集住の場所という点では日本と似ています。またパレンケでは川と滝のほとりに宮殿が建てられ、滝の景観を楽しみ、建物からの眺望を意識しています。この他にも全体的に、森や山との関係、風景との関係を充分意識して、注意深く建物を配置しているようです。これらのことはパレンケに明瞭に現われていますが、テオティワカンをはじめ、ユカタン半島のマヤ遺跡にも見られることです。中東や西欧の都市とはこれらの点で大きく異なるように思います。そのような点もわかり大変面白かった旅でした。



パレンケー森と山に囲まれた遺跡

## 総会（第1部・第2部）の主要議事

石井 昭

本稿で私が報告するのは、10月17日のメキシコシティにおける総会第1部の主要議事と、10月22・23両日のグアダハラにおける総会第2部の主要議事についてです。後者のうち本部役員の選挙についてはやや詳しく述べることにしました。その理由はやがてお分かりいただけると思います。

### 総会第1部

メキシコシティの都心にある PALACIO DE BELLES ARTES（国立芸術会館）内の華麗な大劇場が総会第1部のための会場でした。出席者は、組織委員会からの情報によると、登録手続を終えたイコモス会員だけで約100カ国・700余名。午前中（9時-13時）の開会式に限れば、多くの来賓や会員の同伴者たちがこれに加わりました。

〔開会式〕 先ず、前回総会（1996年、ソフィア）の議長 Todor Kretev氏（ブルガリア国内委会長）が Ramón Bonfil Castro氏（メキシコ国内委会長）を今次総会の議長に推挙し、これを受けた新議長のもとで、議事次第の提案と採択、副議長（日本代表、ロシア代表、コートジボアール代表）の指名と承認、等々が行なわれ、総会の成立が告げられました。次いで、メキシコ大統領 Ernesto Zedillo氏（代理：文化大臣）の祝辞、ユネスコ代表 Hernan Crespo Toral氏の挨拶があって、開会式の第1幕が終了しました。

第2幕へ移ると私も議長団の一員として壇上へ移動。議事次第の通り、イコモスの姉妹組織や友好団体の代表者たちによる祝辞や連帯の挨拶が延々と続きました。登場したのは ICCROM, HOLY SEA, US-AID, GETTY ORGANIZATION, WORLD TOURISM ORGANIZATION, IUCN, WORLD MONUMENTS WATCH, SAAC, 等々です。この種のスピーチは概して疎まれがちですが、いつも退屈であるとは限りません。例えば WORLD MONUMENTS WATCH の代表が「我々の目的は危機に瀕する文化遺産を救うことだ。過去5年間、イタリア、中国、メキシコ、トルコ、ロシア、その他のプロジェクトに計700万ドルを提供した。今後も毎年1回、機会を設けるので、応募して欲しい」と呼び掛けた時には、一瞬、会場にどよめきが起こったかのようでした。

〔表彰〕 長い昼休み（2時間）の後、いよいよ全体会議が始まり、冒頭、2種類の表彰が行なわれました。第1は GAZZOLA 賞で、Roland Silva 氏（スリランカ）に贈られました。連続3期にわたり会長としてイコモスの発展に献身した功績が評価されたものです。第2は名誉会員称号で、Hiroshi Daifuku 氏（アメリカ）など11人の長老たちに贈られました。これらを伝達したのは審査会代表 Saleh Lamei氏（エジプト）です。

〔特別委員会〕 次の議事は、会期中の実務を担当する特別委員会の設置でした。前日の役員会議で準備された原案に沿って、① CANDIDATURES COMMITTEE（選挙管理委員会）、② CREDENTIALS COMMITTEE（投票資格委員会）、③ RESOLUTIONS COMMITTEE（決議準備委員会）、④ PROGRAM AND BUDGET COMMITTEE（事業・予算委員会）、⑤ COMMUNICATIONS COMMITTEE（情報通信委員会）を設置することが決まり、委員会ごとに各5名の委員が選任されましたが、問題が無かったわけではありません。翌日から委員も関係者もシンポジウムに参加するため4都市に分散してしまいます。はたして任務遂行は可能なのか、と危惧する声があがったのは当然でしょう。今次総会を特徴づける「分散移動方式」は一種魅力的であったにせよ同時に非生産的であったと言わねばなりません。

〔執行部報告〕 全体会議の後半では執行部3役による総括報告が行なわれました。

会長 Roland Silva 氏は、第9回総会（1990年、ローザンヌ）で初当選して以来、3期にわたって在任し、今回をもって引退するだけに、個人的な感慨も込めて過去3年間ではなく9年間の振り返り、イコモスの組織と活動の諸般に言及しました。なかんずく、この